



ised@glocom d4 comment



hiroki azuma

hazuma@glocom.ac.jp



「つくる」って何を？

- small innovation=コミュニケーションの連鎖・増殖
- idea / simulationの例が出てきたが。。。。
- invention(in+venire)とinnovation(in+novus)は違う？

- しかし「自然の支配力」は高まっているのか？
- inventとinnovateが同じになる世界を相対化したい

1960-1970年代

● A.C. Clarke 「2001年宇宙の旅」

すわって読むだけしか自由のきかない旅だが、暇つぶしになるものはたくさんあった。公式書類とメモと議事録に飽きたら、大型ノート大のニュースパッドを船の情報回路にさしこんで、地球からの最新レポートを読む。世界有数の電子新聞が、彼の意のままにつきつぎと現われる。大新聞社の符号はすべてそらで覚えているので、パッドの裏側にあるリストを調べる必要はない。表示装置のスイッチを短時間記憶に切り換え、第一面を両手で持って、見出しをざっと捜し、興味のある記事を心にとめる。どの記事にも数字二つの参照番号がついており、数字をボタンで押すと、切手大の記事が、スクリーンにきっちりとおさまるくらいに拡大されるのだ。そして気楽に記事を読む。読み終わったら、また全ページに切り換えて、ディテールを読む必要のある新しい問題を捜せばいい。

このニュースパッドとその背後にひそむ風変わりなテクノロジーは、完全なコミュニケーションをめざす人間の探究の最後の回答ではないか。フロイドはときどきそんな思いにとらわれる。彼はここ、宇宙空間のかなたにおり、一時間数千マイルの速度で地球から離れつつある。それでいながら、わずか数ミリ秒で、お望みの新聞の見出しを見ることができるのだ。[略]記事は一時間ごとに新しいものと取りかえられている。たとえ英語版だけを読んでいても、ニュース衛星から送られてくる絶えまない情報の流れを吸収しているだけで、一生がすぎてしまうだろう。

このシステムを改良したり、これ以上便利にしたりする方法を想像するのは困難だった。しかし、やがてはこれも過ぎ去る時代がくる。それに代るのは、カクストンやゲーテンベルグにとってニュースパッドがちんぷんかんぷんであるように、おそらく想像を絶したものだだろう。

1960-1970年代

- ハーマン・カーン「西暦2000年」1967
- 「未来学」
- 電子化 = オートメーション
- 電子技術はコミュニケーションを増殖させるというよりも、人間の自然に対する支配力を高めるものと理解されていた

- 廣松渉「世界の共同主観的存在構造」1972
- 20世紀の半ばの1/3は「諸学の停滞期」である。
- この指摘は本当に乗り越えられているか？

まとめ



postmodernity

=コミュニケーションの連鎖が自己目的化した世界

=実際にそれが富を生み出す世界

=理論的にも補強された世界(システム論、創発性)

コミュニケーションが万能に見える世界



しかし、それでは届かない領域がないだろうか？

「情報技術の外部」はどこ？